



るが、週辺からその他の目立った遺構が検出されていないため、はっきりとした性格は不明と言わざるをえない。SD〇三からはその他、「松」「綱長」などと記した墨書土器や木製人形などの木製品が出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1)は上端がキリ・オリ、下端がオリ、左右がサキにて加工されている。木簡の上・左端の文字が切られているから、少なくともその方向は二次的に加工されたものであろう。木簡として使用された後に、何らかの木製品として転用された可能性が高い。また、裏面には横方向に切り込みが入っているが、それが木簡として機能している当時のものか、二次的なものかは判断できない。

表面には、不明二字に続き「二百六十四束」の字が書かれている。稲の数量を記したものと考えられ、出挙に関連する資料である可能性が高い。数人分をまとめて記録していたものであろう。仮に一〇人でまとめたと仮定すると、一人当たりの稲の量は約二六束となる。「二百六十四束」の左下にも墨痕が認められるが、前述のとおり二次的な加工により欠損し、さらに残存状態も悪いため判読できない。(2)は上下・左右いずれも二次的なオリにより欠損しており、さらに木簡のほぼ中央で二つに折れている。二行以上の墨書があったものと考えられるが、木簡の遺存状態が非常に悪く、墨痕が確認できるのみであり、釈文やその内容等は全く不明である。(谷口明伸)